

だまって吉公の後からついて行きました。

すると吉公はお婆さんのそばへつかつかと進んで行って

「おい、お婆さん、納豆をおくれ。」といいました。すると、お婆さんは口をまぐもくへむせむせながら、

「一銭の苞ですか、一銭の苞ですか。」といいました。

「一銭のだいー」と吉公は叱るようにいいました。お婆さんがおすおすと一銭のわら苞を出しかけると、

「それはいやだ。そっちの方をおくれ。」といいながら、いきなりお婆さんの手の中にある一銭の苞を、ひったくってしまいました。お婆さんは、かあいそつに、目が見えないものですから、一銭の苞のかわりに二銭の苞を取られたことに気がつきません。吉公から、一銭受け取るよ、

「はい、ありがとうございます。」と、いいながら、またヨボヨボ向こうへ行ってしまいました。

吉公は、お婆さんから取った一銭の苞を私たちに見せびらかしながら、
「どうだい、一銭で二銭の苞を、まきあげてやったよ。」と、自分のいたすらを自慢するよういいました。一銭のお金金で、二銭の物を取るのには、いたすらというより

も、もっといけない悪いことですが、そのころ私たちは、まだ何の考えもない子供でしたから、そんなに悪いことだとも思わず、吉公がうまく二銭の苞を、取ったことを、何かエライことでもしたように、感心しました。

「うまくやったね。お婆さん何も知らないで、ハイありがとういさいます、といったねえ、ハハハハ。」と私がいいますと、みんなも声をそろえて笑いました。

が、吉公は、お婆さんから、うまく二銭の納豆をまきあげたといっても、何も学校へ持って行って、食べるというのではありません。学校へ行くと、吉公は私たちに、納豆を一つかみずつ渡しながら、「さあ、これから戦いっこをするのだ。この納豆が鉄砲だまだよ。これのぶっつけっこをするんだ。」と、いいました。私たちは、ふた組に別れて、雪合戦をするように納豆合戦をしました。キャッキャキいいながら、納豆を敵に投げました。そしておもむき合い戦いっこをしました。

あくる朝、また私たちは、学校へ行く道で、納豆売りのお婆さんにあいました。すると、吉公は、「おい、誰か一銭持っていないか。」といいました。私は、きのう納豆合戦のおもしろかったことを思い出しました。私は、さっそく持っていた一銭を、吉公に渡しました。吉公は、きのうと同じようにして、一銭で二銭の納豆をだまして取りました。その日も、学校でおもしろい納豆合戦をやりました。

銭：昔の金銭の単位。
一銭は一日の百分の一。

すると、そばにじつと立っていた納豆売りのお婆さんです。私たちが、いっしょに泣き出す声を聞くと、急に首の目を、シヨボシヨボさせたかと思つくと、おまわりさんの方へ、手をぐりによりながら、

「まう、旦那さん、堪忍してくください。ホンのこの坊ちゃんたちのいたすらだ。わるきでしたのじゃありません。いいかげんに、堪忍してあげておくれなさい。」と、まだ目を光らしているおまわりさんをなだめました。見ると、お婆さんは、目いっぱい涙をたたえているのです。おまわりさんは、お婆さんの言葉を聞くと、やっと吉公の手を離して、

「お婆さんが、そつこつこのなら、勘弁してやさう。まう一度、このななをすすめるべし、承知をしないぞ。」と、いながら、向こうへ行つてしまいました。すると、お婆さんは、やっと安心したように、

「まあ、坊ちゃんがた、はやく学校へいらつしやい。こんなから、まうこのお婆さんに、いたすらをなめるのはありませんよ。」と、いいました。私は、お婆さんの目の見えない顔を見ると、穴の中入でもはいりたいような恥しさ、悪いことをしたという後悔とで、心の中がいっぱいになりました。

「このことがあつてから、私たちがぶつりつと、このいたすらをやめたのは、申すまでもありません。その上、餓鬼大将の吉公さえ、前よりはよほどおとなしくなつたように見えました。私は納豆売りのお婆さんに恩返しのため何かしてやらねばならないと思ひました。それでその日、学校から家へ帰ると、

「家では、納豆を少しも買わないの。」「と、おっかさんにききました。

「お前は、納豆を食べたいのかい。」「とおっかさんがききました。

「食べたくなはんだけれど、かあいそつな納豆売りのお婆さんがいるから。」「といいました。

「お前が、そつこつ心がけて買つのなら、時々は買つてもいい。おつこ様はお好きな方なのだから。」「と、おっかさんはいいました。それから、毎朝、お婆さんの声が聞こえると、お金をもらつて納豆を買いました。そして、そのお婆さんが、こなくなる時まで、私は大抵、毎朝、お婆さんから納豆を買いました。